天笑の跡

宵月ジュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天笑の跡

【Ｎコード】
Ｎ５１５７Ａ

【作者名】
宵月ジュン

【あらすじ】
一人東京に上京した高校生の爆笑ラブコメディ！様々な人と出会い、ボケまくり、ツッコミまくりのおかしな毎日！主人公の中川楓（なかがわかえで）は無事に波乱の学園を卒業出来るのか？愛あり笑いあり、ちょっぴりシリアスありの痛快ストーリー！

プロローグ（前書き）

このページにお越しいただき誠にありがとうございます。
無能な癖に納得いくまで更新しないという駄目作者ですが宜しくお付き合い下さいませ。

プロローグ

季節は春。
散り始めた桜もあればしぶとく残っている桜もあり、風もわりと暖かくなってきていた。特に目立つ事も無く、教室の隅で一人暗く過ごす事も無く、いたって普通に中学を卒業した中川　楓は、両親の意見に反対して独断で進路を決めて上京し、来月からここ東京の高校に晴れて通うことになった。
上京と行っても小学五年生までは東京に住んでいたため、楓にとっては帰ってきた感じだ。
やっぱり東京の雰囲気は楓にピッタリあっていた。
確かに空気は薄汚れていて体には悪いのだろうが、都会独特の明るくにぎやかで、弾む様なウキウキ感が楓に不思議と活力を与えてくれる。
ただ居るだけで若さを徐々に吸い取られそうな田舎の雰囲気にはどうも馴染めずにいたので、早くこっちに引越して来たかった。
向こうに住んでいる時に親に内緒でやったアルバイトで貯めたお金で今の１Ｋのアパートを借りた。
勝手に決めた上京とはいえ、いざ引越となれば少し位は親が援助してくれるだろうと考えていたのが甘かった。
両親は一円たりとも出してはくれず、結局自分で汗水垂らして稼いだ大事なお金を使った。
当然と言えば当然なのだが。
来月といっても入学式はあと二日後。
部屋の整理も三日かけてダラダラと終えた今、特にやる事もない午後の昼下がりは退屈でしかたない。
遊ぶお金はもう一銭も残ってない。
外は悔しいくらいに爽やかに日が射している。
上京初日から調子に乗って、やれ服だ、やれ美味しい外食だ、やれ

ゲームだ漫画だと先の事など少しも考えずに使いまくり、あれよあれよと財布は軽くなってしまった。
残るはギリギリの生活費だけ。
あの親のことだ――実の子が遠い地で一人家賃に困ったところでびた一文払ってはくれないだろう。
それだけにこのお金だけはなんとしても無駄な消費の誘惑から死守しなければならない。それには余計な外出などせずに黙って部屋でゴロついている方が利口だ。
それとも昨晩やっとの思いで荷物の整理を終えたばかりなのに、せわしなく今から重い腰を上げて新たなバイトを探しに行くべきか否か。
そう考えただけでも全身の力が抜けていくのだから、今日はひとまず休んだ方がいいとグータラな楓は甘い判断を下した。
そうと決まればやる事は大体限られてくる。万が一の為にと、ある程度多目に働き稼いだお金でためらいもなく買った漫画かゲームのどちらかだ。
万が一の時に使うはずが予想よりも早い、にせ万が一の登場に非常金はあっけなく下らない娯楽物に化けてしまったのだ。だが楓にとってこの娯楽物は最高の暇潰しだ。昔からゲームが大好きで一度やり始めると時間を忘れてしまう時がある為二日などあっと言う間に過ぎる。
だが流石に入学してからバイトを探すのはキツイので明日には必ず決めときたい。
面倒な現実を一旦忘れて、お気に入りのゲームを夕方までやると、腹が減ってきたので近くのコンビニまで晩飯を買いに行く事にした。
食後に又やるため一旦セーブをすると本体とテレビの電源はそのままにして立ち上がり、起きてから着ている上下お揃いのブルーのパジャマをフローリングの床に脱ぎ捨て、白い洋服タンスの上から二番目の引き出しから黒のパーカーを取り出し、三番目の引き出しからブルーのジーンズを取り出すと、サッと着替えた。

どうせ近場のコンビニだしと小汚いサンダルを履き外に出た。
沈みかけの太陽がオレンジ色の光を放っている。
コンビニへ行く道は真っ直ぐだが、途中一ヶ所だけ大通りの信号を渡らなければならないのがうざかった。
信号を渡りコンビニへ着き中に入ると始めての店という事もあり、一応どんな店員がいるのか横目でチェックしながら弁当売り場へ向かった。
パッと見た感じそんなに嫌そうな店員はいなかったのでとりあえず一安心して品定に入る。
色々悩んだが結局好物の唐揚げ弁当をカゴにいれレジに向かうと、ふとおでんが目についた。
食べたい――。
セルフでもどうぞと書かれた紙が貼ってあったので自分で取る事にした。
一番小さいカップを
手に持ち大根を取ろうとした瞬間、店員が取りますよと余計な声をかけてきた。
自分でゆっくり選んで取りたいからわざわざカップを持ってるのにそれを店員にやられてはセルフの良さが無くなってしまう。
同じ大根にしてもそれぞれ鮮度が微妙に違うんだ。
なるべく美味しそうなのを取りたかったのに邪魔をされた様で気分が悪い。
だが今更買わない訳にもいかない。
仕方なく大根だけを買う事にした。
店員が取ったのは予想通り楓が取りたかった大根ではない。
だいぶ時間が経っていそうな大根だ。
まあいいかと自分にいい聞かせながらコンビニを出て帰路に着く。
途中の信号がタイミング悪く赤に変わり足止めをくらう。
信号待ちの間さっきのゲームの続きを頭の中で考えていると足下に妙な違和感を感じた。下を確認すると可愛い黒の仔猫が楓の足にス

リスリとまとわりついている。
なんで仔猫がこんな所にいるんだろう？
飼い主とはぐれたのか、あるいは捨て猫か？いや綺麗な毛波をしているから恐らく飼い猫だな――などと考えていると後ろから女の子の声がする。

「ネルー！駄目よ。こっちに来なさいっ」

楓が後ろを振り向くと仔猫の飼い主らしき女の子が、黒いセミロングの髪を風になびかせながら少し焦った顔で仔猫を呼んでいる。
だが肝心の仔猫は女の子の方を見ながらも楓の足にべったりとしている。
楓も実家では猫を飼っていたのでまだジーンズにその匂いがついているのかもしれない。仔猫が戻らず困った女の子はスタスタと仔猫の方に歩み寄ってきて楓にすいませんと謝りながら仔猫をヒョイとだっこした。
女の子の胸元に抱えられた仔猫はゴロゴロとうなっている。

「こんな事初めてなんです。うちのネルちゃんがこんなに他の人になつくなんて」

女の子は仔猫の頭を優しく撫でながら話かけてきた。
女の子に対しての免疫力が低い楓は緊張してしまい何て返したら良いのか返事に戸惑う。ましてやこんな可愛い女の子なら尚更だ。
楓は取り合えず
「そうなんだ…」
と無難な言葉で動揺を隠した。

「あっ！もしかしてあなたも猫を飼っていらっしゃるのですか？」

女の子は思いついた様に瞳を輝かせて質問してきた。
その瞳は明らかに肯定を求めている。
最善の返答を模索する。
楓は今現在猫を飼ってはいないが、実家には猫がいた。
過去形になるがそれでも良いのだろうか。
しかも主に世話をしていたのは母親で楓はたまに気が向いたら餌をあげる程度だった。
ここまで細かく正直に説明をして、彼女の期待を裏切りはしないだろうか。
それともなごり惜しいが、もう会うこともないだろうし、いっそ適当に、はいそうですと言って彼女に満足してもらいサッサと帰った方が楽なのか、楓は一瞬悩み、いい言葉を思い付いた。

「ねっ……猫は昔から大好きで実家で一匹飼ってるんだ」

これなら嘘ではないし、ついでに猫好きという事もアピール出来て一石二鳥だ。

「本当ですか？それならなつくのも不思議じゃないですね」

いやっ――いまさっきこんな事は初めてだと言ってたし、猫臭い服を着ている人は自分以外にも沢山いるだろうし、自分にだけなつくのは、やはり不思議なんじゃないかと内心軽いツッコミを入れる。
本音を言えば実際に自らの手で彼女に何気無くツッコミを入れ、白く透き通る肌をした彼女の体に触れたい。
それは楓にしては珍しい感情だった。
出会って間もない人にこんな好けべな事を思ってしまうという事は、すでに彼女に魅了されているのか――ただ単にアレが溜っている時の無差別的な欲望とは思えない。そんな馬鹿な事を考えている間にも信号はもう何度も赤から青に変わっている。

彼女には真顔でそうだねと合わせた。
楓にしてみたら、彼女の性格の方がよっぽど不思議だった。
見た目はおとなしそうなのに、妙に人なつっこい感じだ。
只の天然キャラなのか偶然楓になついた事による仔猫パワーがそうさせているのかわからない――が、このままサヨナラは、ちと寂しい気がした。
あわよくばお友達になりたいと切に願う。
だがこんな時、何に願えばいいのか。
まだ月は出ていない。寝坊月め！大事な時に居やがらねえ。
楓はそう思いながらさりげなくパーカーの左腕の袖を上げ、左手首のデジタル時計をチラっと確認すると十七時三十六分だった。
元気いっぱいに光輝やく月が出る時間ではない。
いいとこモノクロのしけた月がノーメイクで顔をさらしている位だ。
こうなったら何かにお願いするなんて情けない気持ちは燃えるゴミ箱に捨て、自力で交友関係を築くしかないようだ。
楓は思った。
（よし！勇気を出して自分の言ボールでパスを出すんだ。
どんなパスがいいか――そうだ！先ずは仔猫の名前を聞こうぞよ！
ふっ……本当はさっき彼女が仔猫を呼んでいた時にネルとハッキリ聞こえたのだが、肩慣らしには丁度いい質問だ。
どうせおっとりした彼女だしバレてはいまい。
そこまで細かくツッコめる訳ないしな）

「んんコホン……この仔猫ちゃんはなんて言う名前なんですか？」
（おっしゃ！自然に聞けたぞ。この質問を架け橋に彼女のテリトリーへ、一気に侵入するんだ！かつてトルネードを武器にアメリカへ渡った勇敢なあの男の様に！ゆけ！我が言ボールよ。そして願いを叶えたまへー！）
楓の質問ボールを受けた彼女が返答する。

「名前はネルって言います。でもさっきネルを呼んだ時に聞こえてると思ってましたけど」

（ぐぬおぉー！
ツッコまれたー！
まさかのソロホームランだよっ！
はぁ……はぁ……みくびった。
てっきり只の天然キャラかと推測していたが、こいつぁーとんでもねぇ怪物バッターだぜ。これからは慎重に質問の球種を選ばないと、えれえ事になるな）

「あっ、そうでしたね！ネルちゃん、いい名前ですね！どうしてネルちゃんっていう名前にしたんですか？」

「良く寝るので単純にネルと名づけました。何か変でしょうか？」

仔猫を抱えながらそんな可愛い顔で言われたら例え変でも変じゃないと誰だって言ってしまうだろう。「全然変じゃないです！立派な由来ですよ！……なあネルちゃん？」

楓はネルの頭を人指し指でチョンと触れながら言った。

「にゃー」

ネルはまるで楓の言葉理解したかの様に小さく鳴いた。
それを見た彼女も嬉しそうにニコっと笑みを溢す。
「オレ、最近この辺に引っ越して来た中川　楓と言います」

楓はらしくもなく頬を紅潮させ何気に自己紹介をした。

「私は新川　美咲と申します。どうぞよろしく」

美咲はペコっとお辞儀をしながら挨拶した。よろしくという事はお友達になりましょうと受け取って問題はないだろう。
そうおもったら緊張でこわばっていた心が急に軽やかに弾みだした。
そのままいくつか質問を交し美咲が同い年だと言うことがわかった。
同い年なので楓は徐々に敬語を控えて、自然にフレンドリーな言葉使いへとスライドさせていった。
彼女はというといつまでも敬語で会話をするので、タメ口でいいよと言ったが敬語の方が喋りやすいとの事なのでずっとそのままだ。
そして辺りが薄暗くなってきたのでお互いそろそろ帰る事にしてた。
目の前の信号が丁度今青に変わったが、彼女をゆっくり見送るため次の青で渡る事にする。
彼女は
「それではまた」
と言い楓のアパートとは反対方向へ歩いて行った。
後ろ姿も実におしとやかだ。
彼女は少し歩いた所で、はたと振り返り軽く会釈をしながら手を振ってきてくれたので、勿論直ぐ様、手を振り返した。
誰かにこうして手など振ったのはあまりにも久しぶりな為、内心照れてしまう。
楓は信号が青に変わったのを確認すると今度はちゃんと渡る。
長話に付き合ったおでんはすっかり冷めてしまった。
普段なら温め直すのが面倒なため不機嫌になるが、今日は冷めたおでんも美味しく食べられそうな気がする。
些細な事などまるで気にならなくなる恋の力というのは、一時的ではあるが長年山にこもって悟りを開くよりも、よっぽど人を成長させてくれる気がする。
歩調に合わせながらコンビニのビニール袋を微妙に縦に振り、気分良くアパートに着くと、部屋に入る前に集合ポストに向かう。

１０２号室――そこを開けると中には光熱関係のお知らせや、ピザ屋の広告チラシなどが入っていた。いかがわしいチラシが目についたので興味本意で手に取り、キャッチコピーや料金などをササッとみる。
写真の女の子のセクシーなポーズに、下がわずかに反応するも、学生が気軽に手を出せる値段ではない。
しかしこの現場をアパートの住民に見られたらと思うと、のんきに変な妄想をしている訳にもいかず、必要な物だけコンビニ袋に入れ、不要な広告などはアパートで用意された共同のゴミ箱にポイした。
無論、大人のチラシも不要物の仲間入りにした。
ジーンズのポケットから部屋の鍵を探りながらドアに向かう。
いつも人気の無い１０１号室の前を通り過ぎる。
この部屋に人は住んでいるんだろうか？
反対のお隣さんには引っ越しの挨拶をしたがここだけ今だ出来ていない。
もうする気も失せ始めているが。
鍵をポケットから掴むと鍵穴に当てる。
反対だ――まだ越してきて間もないので、たまにミスる。
向きを直して鍵穴にさし込む。
ここでも回す方向を間違えながらもガチャっと解除音を鳴らした。
じきに慣れてミス率も下がるだろう。
玄関に入ると直ぐに無意識に鍵をかける。
良くも悪くも昔からの癖である。
実家に住んでいた頃、直ぐあとに親がドアを開けるのに、癖で鍵を閉めてしまい、よく注意されていた。
だが一度体に染みついた一連の動きというものは、なかなか直せないものだ。
競技中に格闘家が途中でコンビネーションを止める位難しいんだと自分に言い訳をして未だに直せていない。
恐らく一生直るまい。部屋に入るとガラス製の小さなテーブルにコ

ンビニ袋を置く。
あまり換気していないせいか、自分独特の臭いが部屋に充満しているのに気付く。
ずっと部屋にいるとその部屋の臭いに鼻がなれてしまい、あまり気にならなくなるが、一度外の新鮮?な空気を吸い込むと嗅覚の働きがリセットされ、さっきまで無臭に感じていた部屋の臭いが鼻につく様になるから困ったものだ。
とりあえずベランダの窓を開け、空気入れ換えをする。
ひんやりと心地いい夜風が頬に触る。
網戸越しにぼーっと天を仰ぐ。
夜空にちりばめられた少ない星くずがキラキラと光放っている。
ふと故郷の空を思い出し、しんみりする。
この東京で一人やっていけるのか。

先ほど当てにした月が、お前じゃ無理だ的な顔で、こちらを見ながら浮かんでいる様に錯覚した夜だった。月に微妙な嫌悪感を抱くも、夜風に当たり冷えた体が熱を欲しがっているので部屋に戻り窓を閉める。

先ほど買ってきたコンビニ弁当を袋から出してレンジで温める。
チン！っとなるまでの間、冷めたおでんの大根を口にする。
意外とおいしい。
浮かれ気分が味覚にいい働きをしているのだろう。
レンジがチン！っとなったので弁当を取り出し、テーブルの前の床に座ると先ずはライスから頂く。
やはり温かいご飯は素直にうまい。
いつも弁当を温めると同じクレーム魂が眼を覚ます。
メインのおかずの横に、おまけ程度に添えつけられた惣菜が意に反して温まってしまう事だ。
サラダ系などが温まるとヘコむ。

最初これに気付いた時はまさに、はっじーめてーの～、へコ～ムーだった。
いっそおかずはメインだけにして料金を下げてほしいものだ。
それでもなんだかんだいって食べるのだが。普段メシ時は必ずテレビジョンを見ながら食べるが、今日は邪魔になりそうだからあえて見ない――美咲ちゃんの妄想の。
家はどの辺なのか、学校はどこなのか、そして一番気になるのは彼氏はいるのかだ。
あの容姿だ、いても何ら不思議ではない。
教えてくれたかは別として、駄目もとでメアド位聞いておけばよかったと後悔の念にかられる。
がしかし、昇華しきった彼女のオーラの前で、ずうずうしく聞ける方が異常だ。
そうだな。もう白昼夢にお邪魔するのはたくさんだし。
現実に目を向けるか。明日は意地でもアルバイトを決めなければならない。
虚しい妄想をおかずにご飯を食べ終えた楓は、続きのゲームをやろうとしたがそれでも微妙に残る美咲ちゃんへの想いが虚脱感を呼んだため、ウジウジした気持を洗い流すべくシャワーを浴びる事にした。

半間サイズの押し入れの上の段にある黒の三段チェスト――その三段目から無造作にバスタオルを取り、浴室へ向かう。
赤の蛇口をひねり、お湯を出す。
水で適温にしてから気疲れした体に浴びせる。浴室内がだんだんと曇り始め湯気と絡まった淡い恋心は換気扇へと排出された。
シャワーを浴びて取り合えず身も心もスッキリさせると床に脱ぎ捨てられたブルーのパジャマを着て、そのまま全てを投げ出し布団に入る。

翌朝わりとスッキリ目覚めた楓は嫌な音を耳にした。
ポツポツと降る雨音だ。
こんな日にバイト探しとは嫌になる。
だが逆に考えればライバルが少ないかもしれない。
何だか希望がわいてきた。
楓は台所で歯を磨くと買い置きしてあるカップラーメンを取り出す。
ポットからお湯を注ぎ出来るのを待つ。
その間に前々から書いておいた履歴書に今日の日付だけ書き足し、封を閉じる。
続けて髪を整え面接を考慮した服装に着替えると三分を越える。
ズルズルとラーメンを食べ終えると直ぐ様玄関に行き、傘立てから黒の傘を手に持ち部屋を出る。
雨はイメージしていたよりも激しく、やる気がダウンしそうになる。
先ずは取り合えずいろんな店がある賑やかな所に向かう。
楓はいつもアルバイト情報誌は見ない。
あんなもの見て電話をするにしても時間がかかるし、多くのヤツから応募があるから採用確率が悪い。
応募者が多数のためか採用担当者も余裕をかました態度で面接をしてくるので、ここで働いてやろうとする気がしない。
それよりも店の表に貼り紙をしている店の場合の方が急募が多いので何倍も受かりやすい。面接をして悪くなければ即採用してもらえるし店の雰囲気も直に見れるし、担当者の方も来てくれて助かったと喜んでくれるのが、何より働く動機に繋がる。
これが楓流のバイト探しだ。
しばらく歩くとバイト募集の貼り紙を見つけた。コンビニだ。高校生は時給七百五十円と書かれている。完全に足元を見た金額だ。
同じ労働でなぜ金額に差がでるのか謎である。
むしろ体力が一番ある時期の高校生の方が元気に働いてくれそうな

ものだが、生活がかかっていないからか。
だが楓の様に一人暮らしをする無謀な高校生もいる。
ここでいくら矛盾に腹を立ててもお金は入ってこないし、もう少し高い店をさがす事にした。
白い息が視覚から寒さを伝える。
くそさみい。この雨の中、長期戦はごめんだ。そんな楓の思いを無視するかの様になかなかいい貼り紙は見つからずとうとう夕方になってしまった。
幸い鬱陶しい雨はあがったが、肝心のバイトが見つからず途方にくれる。
この際安くてもいいかと妥協し始めた時、時給千円の貼り紙が目についた。
まさに砂漠にオアシスだ。
楓はさっきまで死んでいた眼を生き生きとさせ貼り紙の前に駆け寄る。

「うをぉー！　マジですかー！　いいの！？　いいのかい！？　こんな暇そうな喫茶店で千円も頂いちゃって！　こいつは普段頑張ってる俺への神様からの入学祝いかもしれない。神様ごめんよ。いっつもあなたを信じないだなんて酷い事を言っていて。もし面接が受かった際にはあなた様を崇拝する所存です。それでは今から面接を受けて来ます。どうか天から見守っていて下さい、マイゴッド」

神様に思いを伝えた楓はゴクリと生唾を飲み込み、喫茶店のドアを開けた。
カランコロンと古くさい鐘の音が店内に響く。
「いらっしゃいませ～」

かなり年老いたおじいさんが落ち着いた声で挨拶をしてきた。
他に従業員は見当たらない。

緑のバンダナで頭全体を包む様に巻き、カウンターの中でコーヒーカップを拭いてるあのおじいさんがマスターに違いない。
楓はそのままカウンター沿いを進みおじいさんの目の前までいった。
「あの、すいませんが表の貼り紙を見てきたのですが、まだ募集はしていますでしょうか？」
楓はおじいさんと向かい合いカウンター越しに尋ねた。
「もち、まだしとるぞい。こりゃあえらい若い子が来たのー。んじゃ面接するから後ろのテーブル席に座っちゃっいな」
おじいさんはそう言うとトボトボとテーブル席へ向かい歩き始めた。
（ぬわっ、何なんだこのじいさんは！　おかしい！　べしゃりが明らかにおかしいぞ！　もしかして俺はやばい店に来ちゃったのかい！？）
楓はじいさんに不審の目を向けながらも後ろのテーブル席に座りじいさんを待つ。
十分後。
「よっこいしょ。では面接スタートじゃ」
（って、おせーよっじじぃー！　どんだけ待たせるんだよ！　そんなにのろいなら別にカウンターでも俺はよかったよ！　あんた亀だよ！まあいいや、取り合えず面接受けるか……って何で隣に座ってんだよっ！　俺たち恋人かっ！　普通向かいに座るでしょ！
これは亀じいにはっきり聞かなきゃ落ち着かん！）
そう思った楓はおじいさんに質問した。
「あのぉーさっそく質問なんですが、面接はその席で行うんですかねぇ？」

楓は遠慮気味におそるおそる聞いた。

「いい質問じゃ。わしも普段は隣に座らんのじゃが、実は一目見た時からわしはお前さんの事が好きに……」

「ちょっ、ちょっと待って下さい！　僕はそういう趣味ありませんからっ！」

「ふぉっふぉっふぉっ冗談じゃよ。からかってすまんかったの」

（ボケじい！　冗談で済むかい！　こっちは本気で身の危険を感じたんだぞ！　その老眼鏡に、はぁ～って息かけて曇らしたろかい！）

楓は怒りながらも時給千円を思い出しなんとかその場を堪えた。すると急にじいさんはすくっと立ち上がり、ササッと素早く向かいの席に着席した。

（早っ！　どこにそんな力隠してやがった！　さっきのヨボヨボは嘘だったんか！）

じいさんが話始めた。

「では面接を始めたい――が迷っておるんじゃ。実はさっき既に決まってしまったんじゃよ」

（くらぁー亀じい！　いい加減にせんかい！　テメーのヨボウソ歩きで何分待たされたと思ってんじゃい！　挙げ句にもうバイトが決まっただとぉー！　寝言は寝て言えやー！）

楓はブチキレ寸前なのを抑え努めて冷静に質問した。

「では何故募集してるっておっしゃったんですか？」

楓は少しムッとした顔で聞いた。

「だってさっきのヤツより好印象なんだもん。さっきのヤツなんて酷いんじゃよ。半分脅された感じで渋々合格させられたんじゃ」

「確かにそれは酷いですけど、一度合格と言ったのでしたら仕方ありませんね」

楓は半分諦めた口調で言った。

「見捨てるのかい！　こんな、か弱い老人を！　わしお前さんがいい！　お前さんじゃなきゃやだやだ！　あんな不良と働くならもう店辞めるっ！」

（ええーっ！　何故にそこまで考えるかなー。早まるなじいさんよ！　でも俺を選んでくれたのは嬉しいぞ）

「でももし今更断ったりしたら、その方は怒ると思いますよ。何か他にいい方法はないんですか？」

その採用者を断れれば自分がここで働けるとわかるやいなや楓は急に親身に聞き出した。

「えぇ～、それを考えるのがお前さんの役目じゃ～ん」

（お前の仕事だろーっ！　面倒くさがってんじゃねー！）

「わかりました。僕が代わりに断りの電話をかけます。その代わりちゃんと僕を採用して下さいよ」

マスターにしっかりと採用の約束させた楓は問題の不良の採用者へ電話をかるため店の電話から電話をかけた。呼び出し音がなり、相手が出た。

「もしもし、鈴木さんですか？　あのぅ私、鈴木さんが面接をした喫茶店の者ですが、誠に申し訳ありませんが採用の件はやはり不採用という事になりましたので、お知らせのお電話を致しました」

「ああー！　ふざけんなよ！　今からそっち行くから待ってろ！」

「いや来ないで下さ……」

ツーツー……

お話合いの余地なく、電話を御丁寧に切られた。

「どうじゃった？」

マスターがのんきに聞く。

「どうしましょう！ヤツが今からこっちに来るそうです！」

「慌てるでない！　そう思ってすでに策はうってある」

「本当ですか！？」

「うむ。ちょっと待っておれ」

そう言うとマスターは勇ましくトイレへと姿を消した。ガチャッ。鍵をかけた様だ。

（あ、あれ～？　何かおかしいぞ～）

「マ、マスタ～？　何をなさってるんですか～？」

不安になった楓は一応優しく問掛けた。

「後は任せたぞい、勇者よ！」

トイレの中からマスターの王様ぶった声が聞こえた。

「こらぁー！　出てこいやーじじぃー！」

楓は怒りながらトイレのドアをガンガン蹴りまくる。

「これ！　マスターに向かってじじーとは無礼ではないか！」

トイレの中から負け犬マスターが注意した。

「こんな時に関係あるかいボケー！」

尚もドアをガンガン蹴る楓。

「ちょっと待て！　静かにするんじゃ！　何か聞こえんか！」

マスターの声が突然真面目になった。

「何が！？」

プゥ～。

マスターの屁が炸裂した。

「屁こきじじぃー！　貴様だけは死んでも許さねー！　開けろこら

ー！」

「よし、そのいきじゃ！　その溜った怒りをヤツにぶつけるんじゃ！　頑張ってくれ」

「マスター……まさかわざと俺を怒らせて、ノルアドレナリンが出るようにしてくれたんですか！？」

「ふっ……バレてしもうたわい。そう、その通りじゃ。わしとてバカではない。少しでもおぬしの力になれ……」

「んなわけねぇーだろハゲー！　はよ出てこいやー！」

楓は蹴り足が痛くなってきたので、代わりにコーヒーカップでドアをガンガン叩きまくる。

その時、ついにヤツが店に乗り込んできた。

「誰だテメーは！　じいさん出せや！」

鈴木はそう言いながら凄い剣幕で楓のそばに近寄ってきた。

デカイ。こんなヤツに勝てるわけがないと戦う前から白旗モードになる。

そして左の頬に強烈なパンチをもらい、吹き飛ぶ。

その拍子に上着のポケットから財布が落ち、中から一枚のテレカがヒラッと抜け落ちた。それを見た鈴木が叫ぶ。

「これはっ、人気アイドルグループ、メガネッ娘シスターズの超プレミアテレカじゃねーか！」

ヤツの声のトーンからして欲しがっているのが容易に読めた。

どうせ売ろうと思っていたしそれ一枚で丸く収まるなら丁度いい。

「採用を諦めてくれたらそれあげてもいいんだけどな」

すると鈴木は楓の出した交換条件をあっさり飲んで帰って行った。これでなんとかバイト先が決まり、ふーっと安堵の溜め息が出る。見計らったように、なにくわぬ顔でマスターがトイレから出てきた。そのままカウンターにヒョコと座り勝利のコーヒーを飲む。

「ぷは〜！　うまいわい！　ん？　誰じゃ小僧！　ふふっ、まあ良いわ。今日は機嫌がいいから許そう。そうじゃ！　お前さんにさっきのワシの武勇伝を聞か……」

ドゴーンッ！　楓の怒りの踵落としがマスターの頭に炸裂し、マスターの体がかなり縮む。

「ひぃー！　ごめんちゃい！　こんな、ふがいないマスターを許しておくれ！」

「嫌だなあマスター。僕はもう怒ってませんよ……ではこれで約束通り僕を採用してくれますね？」

「その件なんだがね、楓君や……やはり誰かを辞めさせて君だけ働くのは、人としていかがなものかと……」

「やっぱ殺すっ！」

こうして中川楓は――変な店だけどなんとかバイト決定！

明日はついに入学式。

【プロローグ完】

序笑（前書き）

【登場人物紹介】

◆中川楓…１６才の高校生。茶髪のツンツンヘアー。のんきなルックスだが実はお笑いにはうるさい。

◆新井美咲…１６才。黒のセミロング。おっとりとした声。

◆ネル…美咲の愛猫。忠誠心は微妙。気まぐれ

◆マスター…６０才。ボケ好きの元気なユーモアじいさん。普段はノロマだが、気合いを入れると速い。背は低い。

序笑

『ほらほら～楓く～んこっちへおいで～！　おじさんと楽しい事しよ～』

入学式当日の朝――まだ睡眠中の楓は今、夢の中でマスターに犯されかけ、逃げ惑っている夢を見て、うなされている。

「く、来るな……触るなー！」

自分の叫び寝言で、はっと目を覚まし、ガバッと上半身だけ起こした。

はぁはぁと軽い息遣いをしながら今のおぞましいシーンが夢だったと理解すると、だいぶ心が落ち着いてきた。昨日の今日だし当然の結果だろうか。

「くそぉ、亀じいめ！　夢にまで出てきて、ふざけやがる！」

高校生活初日だというのに哀しいバッドスタートだ。

部屋の時計を見ると七時半をまわっている。学園までは歩きで普通に行っても二十分程で着くが初日位は早めに行っとくかなと学園指定のブレザーに着替える。

中学の頃は学ランだったので、私立のブレザーは新鮮だった。

ネクタイは楓にとっては真新しいアイテムなので、つけるのに苦戦した。

制服を着ると、不思議なもので突然高校生という自覚が湧いてくる。

さっきのふざけた悪夢のせいで食欲が瀕死の為、冷蔵庫からゼリー飲料を取り出し、それを登校中に飲む事にした。

今日からのバイトは週に六日、五時から十時、日曜の定休日以外の

フル出勤。
夜飯付きってのはおいしい。
時給はというと、あの後マスターに恩着せがましく迫り、なんと千二百円にアップしたのだ。
深夜でもないのにこの値段は流石に気が引けるが、お気にのアイドルテレカを犠牲にしたんだし、遠慮する事もないだろう。
それにあのくだらんボケを冷たくスルーせずに、しっかりとツッコんでやっているツッコみ料も含めると、案外安いかもと一人部屋で怪しくほくそ笑む。昨日の今日だし当然の結果だろうか。

「くそぉ、亀じいめ！　夢にまで出てきて、ふざけやがる！」

高校生活初日だというのに哀しいバッドスタートだ。
部屋の時計を見ると七時半をまわっている。学園までは歩きで普通に行っても二十分程で着くが初日位は早めに行っとくかなと学園指定のブレザーに着替える。
中学の頃は学ランだったので、私立のブレザーは新鮮だった。
ネクタイは楓にとっては真新しいアイテムなので、つけるのに苦戦した。
制服を着ると、不思議なもので突然高校生という自覚が湧いてくる。
さっきのふざけた悪夢のせいで食欲が瀕死の為、冷蔵庫からゼリー飲料を取り出し、それを登校中に飲む事にした。
今日からのバイトは週に六日、五時から十時、日曜の定休日以外のフル出勤。
夜飯付きってのはおいしい。
時給はというと、あの後マスターに恩着せがましく迫り、なんと千二百円にアップしたのだ。
深夜でもないのにこの値段は流石に気が引けるが、お気にのアイドルテレカを犠牲にしたんだし、遠慮する事もないだろう。
それにあのくだらんボケを冷たくスルーせずに、しっかりとツッコ

んでやっているツッコみ料も含めると、案外安いかもと一人部屋で怪しくほくそ笑む。

【続く】

続きの詳細は後書きをご覧下さいませ。忘れ物がないか初々しく鞄をチェックする。こちらも学校指定だ。ハンカチは普段から持たない。自然乾燥派だが急ぎの場合のみ、髪の毛かズボンのお尻を利用してしまう。

ちり紙――流石に鼻水は自然垂れ流し派とはいかないので、街の配布物を利用している。

もうそろそろ部屋を出ようかという所で、携帯が鳴った。

新しい着うたにしたばかりなので、あまり聴かずに、すぐ出るのを惜しみしつつ、二つ折りの携帯をパカッと開いた。母親だ。

通話ボタンを押し電話に出る。

「はいもしもし」

「楓！　起きてるかい！　今日は学校だろ？」

「心配しなくても起きてるよ」

母親と話しながら、玄関に向かい踵を潰さない様にローファーをはいた。

「本当かい？　あんたが自力で起きるなんて珍しいじゃないか」

少し感心した声で母親が言った。

「まあね。けど自力じゃないかも」

そう言いながら家の鍵を閉め、通学路を歩き出す。

「自力じゃないって……誰かに起こされでもしたのかい？」

クエスチョンボイスで母親が聞いてきた。

「実は昨日バイトが決まってさ、そこの……え？　いや、ちゃんとしたバイトだよ。喫茶店。そこのマスターが今朝夢の中に出て来て、まあ起こしてくれたって言うか、起こされって感じかな」

楓はそう話しながら片手で鞄の中のゼリー飲料を取り出しキャップを歯に挟み手で回し開ける。

本体から離れた口内のキャップを“ぺっ”と飛ばして、既に小さなゴミだらけの道路に紛れさす。

綺麗な道路じゃない分、罪悪感は薄い。

「それじゃあその喫茶店のマスターさんに感謝しないとね！」

詳細をしらない母親は素直に常識を言ってきた。ジュルジュル……ゴクン。ゼリーを飲んだ。

「もちろん……あんな夢じゃなかったらね……」

楓はフェードアウト気味にしゃべった。

「え？　何？」

「いやなんでもない。もうすぐ学園につくからもう切るよ！？」

「はいよ。それじゃあちゃんと勉強するんだよ！　またね！」

「わかってるよ」
と言い、電話を切った。
その瞬間、蒸し熱いサウナからやっと出た時の解放感の様なヘナった溜め息が出た。
親の説教じみた声は初日の登校中には余計こたえる。
上京を反対していた癖に、何だかんだ言ってこうして電話をしてくるのは心配なのか、応援なのか、はたまた大穴で寂しいのか、真相は闇だが出来ればそれらを尻目に着拒したい気持ちが薄情にもある。
だが、もしもお金を仕送りさえして貰えたら、若さ故の愚かな考えなど掌を返すに違いない。
その暁には着信歓迎、略して着歓となる。
男は英語でマンだから、これにすると火を出しそうだ。
それに、なんて現金な人間なんだと思われるかもしれないが、そういう考え自体、見栄っぱりな気がしていた。
楓は昔から洒落にもならない綺麗事はむず痒い。お金があって普通に困る人間などいない。
あり過ぎるなりの恵まれた悩みは別として。だからお金を貰えるなら素直にもなれる。
それでも譲れないものがある事くらいは理解しているつもりだ。
たぶんそれは命よりも大事なもので、それを捨てたら生きた屍と化す物。
そんな物を持ってたらどんなに誇らしいだろう。
そしてそれを守り抜くのが人生なのかもしれない。
楓はそう思ったら急にやる気が出てきた。
「よし行くぞ！　我が学園へ！」
（って、あれ？　なんか変な道に出たぞ……道ぃ！　間違えてるよぉーっ！　どーじよー！　遅刻するー！　あんな夢とはいえ折角亀じいが起こしてくれたのぬぃー！　ごめんよ亀じい！　やっぱり時給アップなんて悪事を働くんじゃなかったよ。これは亀じいの恨みかもしれない……）

「許してぇー、亀じいいぃー！」
楓はその場に膝まずき、空に叫んだ！
「呼んだかい！？」
楓が振り向くとそこには車に乗ったマスターが親指を立てて、すかしていた。
「かかかっ亀じいぃー！　なんでここに！？」
「いまからパチンコの朝一狙いに行くとこじゃ。お前さんも来るかい？」
「高校生をパチンコに誘ってんじゃねー、不良じいさんがぁ！　つか丁度良かった、学園まで乗せてくれ！」
楓は返事を聞く前に勝手に助手席に乗る。
するとマスターは体をクネクネさせ
「えぇ～？　困るよ～ぅ。わしゃこれから大事な闘い備え、並ぶんだも～ん」
と意地らしく言った。
それを聞いた楓の目がつり上がる。
「早く行かねーとフロントガラスの前にある、この変なぬいぐるみ引き裂くぞっ！」
楓は黄色のぬいぐるみをガっと駄目もとで掴み脅した。
「これ！　マッ、マスタード君を離さんかっ！　それはわしの命の

次の次の次の次の次の次の次位に大事な物なんじゃぁ〜！」

（何かあんまり大事そうには聞こえないんですけど……）

「っとにかく急いで創仁学園へ向かえば、このマスタード君？　は解放してやるよ！」

「わかったよぉ、今行きますよっ。その代わりマスタード君に優しくしておくれよっ」

マスターはそういうと車を従順に創仁学園へ走らせた。「つか何？　この長細いスティック状で一応マスタードに見えなくはない、ぬいぐるみは？　手にホットドッグ持ってるし……」

楓はマスターと妙なぬいぐるみのミスマッチが、どうも気になり聞いた。

「かわいいじゃろ？　ゲーセンで取ったんじゃよ。名前が気に入ってての。わしマスターだからマスタードなんてピッタリじゃと思い、洒落でゲットしたんじゃ。四千円かけての」

「四千っ！？　それ洒落で使う金額じゃねーよ！　あんた、かなり欲しかったんじゃね！？」

だけどその割には大事にしてるなと思い、その理由を聞くと、マスターは唐突に語り出した。

「マスタード君はわしの身代わりになり、宇宙人に……連れて行かれたんじゃっ！　……あれは、ある明け方、わしがほろ酔い気分でマスタード君と家路についていた時じゃった。急に空から全身黒ずくめの不気味な生物が現れてマスタード君を連れ去って行ったんじ

や！」

「うそっ！？　それやばくねっ！？」

マスターは続けて語り出した。

「余りのスピードにわしは唖然とするしかなく、只々人間の無力さに悔やむしか出来んかった……次の日、わしは悲しみの中、マスタード君二号をゲットしにゲーセンへ向かう途中、なんと道端に落ちているマスタード君を発見したんじゃ。わしは嬉しくて泣きながらマスタード君を抱きしめた。それ以来マスタード君はわしにとってお守りみたいな物なんじゃ……」

「そんな歴史があったんですか……そうとは知らずすいません……ってあんた一度見捨てたよねぇっ！？　この薄情物ぉー！」

そして楓は思った。

（しかもそれどう考えても、ただのカラスじゃね？　けどこのアホマスター何故だか宇宙人だと信じてるし。まあ知らねー方が幸せって事もあるし、冥土の土産に黙っといてやるか）

そんなバカげた話をしている間に車は学園に到着した。マスターは丁度校門の前に車を止めてくれた。

「サンキュー亀じい！　話は又、夕方ね」

そう言って車を降り急ぎ足で学園内へ入って行く。

私立創仁学園――今日からここで新たな学生生活が始まる。

校庭には同じ制服を着た新入生が、わんさかいる。

さりげなく、あの子――新井美咲がいないか眼球をコキ使う。

未練たらしく探してしまう自分に呆れる。

一度出会っただけなのに、ここまで影響力のある子は初めてだ。
又その事実があの子の価値観を上げ、楓を苦しめている。
そんな不安定な気持ちのまま式に出席した。しばらく退屈な式に無駄な時間を使わされ、脱力しかけた所で、なんとか式をクリアした。
そのまま一旦教室に行く様に指示されたので一年一組に向かった。
教室に入ると黒板に席を決めたプリントが何枚か張り付けてあった。
中川――プリント上に自分の名前を見つけると、そそくさと席に着く。
周りには既に仲良くなっている人もいて、その社交性の高さが羨ましい。
楓は小学生の頃はガンガン友達を作っていたが、中学生の途中頃から、考え方が急に大人びてきて、周りの同級生がやけに子供っぽく映りだし、輪の中に上手く溶け込めなくなってしまったのだ。
おのずと、社交性は急激に下がり、友達も徐々に離れていき今に至る。
だがそれを教訓に高校からは持ち前の高い社交性を復活させ、友達をある程度は作る気でいる。
少々面倒だが、いれば何かと便利なのが友達だ。
恋人以外に自分の核まで見せる気は毛頭ないが、そこへ案内したくなる程の友達と出会うに越した事はない。
勿論女子の友達も作りたい。
クラスの女子を拝見すると中々のレベルが揃っている。
少し前なら完全にノックアウトされていたであろう。そう――あの日彼女にさえ出会わなければ。クラスの女子も友達として付き合うなら申し分ないが、恋人と考えると、贅沢にも比べてしまう。
幸か不幸か、楓の恋心は彼女のオーラに味をしめてしまった。
基本的には諦めつつも、ふとしたキッカケで脳裏に焼き付いた彼女の残像がちらつく。
その度に頭をかきむしり、儚い記憶を追い払う。
無意識なだけにどうしようもない。

しばらくして担任の先生が入ってきて元々開いていた教室のドアをバタンと閉めた。

「はい静かにー！」

先生が教壇から発した大きい声に微妙にざわついていた生徒達が急に黙り、教壇に注目した。
初日という緊張感もあり、皆真面目な顔を作っている。

「今日から君達の担任をする山本です」

それから淡々と自己紹介をする先生は、仕事の臭いがプンプンした。
そこに教師としての自覚は一切感じられず、与えられたノルマをチンタラこなす、見習いタクシーと何らかわりない。
公務員という、安定湯にどっぷりつかり、例え偽善ですらムチャはしない、保身主義者のお手本ティーチャーといった感じだ。
今時熱血教師ってのも時代錯誤な気もするし、何か問題を起こすと聖職者というイメージがら、世間から叩かれ易い現状を考えたら、妥当な仕事ぶりだと理解は出来る。
逆にほとんどの生徒も教師に期待などしていないだろうから、皮肉にもバランスは取れている。
そんな学校環境を社会環境の縮図と考えたら、腐りきった社会にヒーローを送りこみたくもなる。
担任の自己紹介が終わり、その後細かな説明が続き、お昼過ぎには放課する事となった。明日の友達作りのため、大体の目星をつけ終えたら、いよいよ目的の場所へ向かう。
この学園へわざわざ来た理由がそこにあるのだ。少し興奮気味に目的の部へ向かう。
教室のある本館の隣に、白い五階建ての部活館がある。

一階から三階が屋内スポーツフロア、四階、五階が文化芸術フロアだ。目指すは最上階にあるお笑い研究部！
以前学校見学に来た時、調べて来たものの、実際に専用舞台でネタを練習する部員数の多さに驚いた。
それもその筈、どの部もそうだが、この学園の部活顧問は全員その道のプロ、もしくは元プロなのだ。
故に芸能界やスポーツ界と繋がりがあるため、夢を目指す学生が一同に集まる。
楓自身は、別にプロを目指すつもりはないのだが、自分の実力を試すべく、入部をしようと思っているだけだ。
部活館の入口を入ると左手にエレベーターがある。
楓はボタンを押しエレベーターに乗り込み、五階のボタンを押す。
エレベーターが上がっていき、途中三階で停まり、エレベーターが開いた。
すると目の前に、卓球のラケットを持った男子学生が立っていた。
「あっ、これ上行きますけど」
楓はその男子に行き先を親切に教えた。
「サンキュー、青年。でも僕も上に行くのさ。乗せておくれっ」
キザな言葉使いで、そう言いながら、その男子は太った体で、のしのしとエレベーターに乗って来た。
（なっ、なんだこのデブはっ！？　キャラと喋りが合ってねぇよ！）
見た目からすると、その手に持ってる卓球のラケットが、お好み焼き用の銀のヘラに見えて仕方がない。ぶひーっと叫びながら、豚天サーブでも打ちそうな顔だ。
エレベーターが五階に着きドアが開くと、その太った男子は駆け足

で左手の通路の角へと消えていった。
続いて楓もゆっくりと降りた。

（アイツ意外に足速っ！　一応運動部だけの事はあるな）

降りた右手には窓があり、そこから本館が見える。エレベーターの向かいには自動販売機が設置されている。
楓はその手前の左手の通路を曲がった。
通路を挟んで、左右二つずつ、四つの部がある。右手前に声優部、奥に漫画イラスト部、左手前に、ゲーム制作部、そして奥にお笑い研究部がある。
通路を真っ直ぐ進み、部室の前に立ち止まる。
（ついにここに来たぞ。今日から俺のお笑いセンスをビシビシ鍛えあげるんだ！）

楓は心の中で気合いを入れた。既にドア越しから、大きな声が聞こえてくる。先輩達の気合いの入ったツッコミだろうか。その活気ある雰囲気にワクワクドキドキしながら、ドアノブに手をかけ、グルッと回し部室のドアを開けた。
ドアノブに手をかけたまま、首だけ伸ばし室内を見渡すと中央に卓球台があり、目を血走らせて必死に卓球をしている人二名、その審判らしき人一名、計三名の人が目に映った。プレイヤーの一人は、さっきエレベーターで一緒だった男子だ。

「喰らうがいい！　秘技っハヤブサスマーッシュ！」

「来いやー！　って遅ぉ！　うわっ！　来たねーぞ、オーモリ！」
えらく白熱した声が室内に響き渡る。
その時楓が審判らしき人に気づかれた。「君誰ッスかー！」

その審判らしき人の叫び声に、プレイしていた二人も一旦タイムして、スッと楓の方を見やった。

「もしや君も卓球やりたいのかーいっ？」

さっきの太った男子が離れた所から叫んできた。

「いっ、いえっ！　間違えました～。　失礼しま～す」

楓は焦りながらドアを閉めた。

（どうなってんだ？　ドアには確かにお笑い研究部って書いてあるしな……あっそういえば、あのデブ三階から来てたよな。って事はアイツらお笑い研究部の皆がまだ来てないからって卓球部から道具一式借りて、無断で部室を使ってる悪戯どもかもしれん！　よし、ここは一つ俺が奴らを追い払って先輩達に誉められる様に株を上げとくか！）

楓は悪餓鬼排除を決心して、再び部室に入った。

室内に入ると依然として悪三人集は、我がもの顔で卓球をお楽しみだ。

楓はキリッとした面持ちで三人の近くに近寄った。

「すいませんっ！　ここお笑い研究部の大事な部室なんですけど！　関係ない人は入らないでもらえますかっ？」

その怒鳴り声に、プレイしていた二人は手を止め、じゃけな目で楓を見た。

急に放っとかれたピンポン玉は、卓球台から弾け落ち、床でポンッ

ポンッと弾んでいる。
「また君かい？　何か勘違いしてるけど僕達はここの部員さ。関係ないのは君の方じゃないのかい？」
少し呆れた顔で太った男子が言った。
予想外の返答に楓の目は点になった。同時に勘違いをした事に恥ずかしくなった。
「じゃ、じゃあなんで卓球なんかしてるんですか？」
「しょーがねーじゃん！　皆辞めちまって、今後どーしたらいいか分かんねーんだもんよ！」
太った男子と卓球をしていたボウズ頭の奴が驚愕の事実を漏らした。いきなりそんな事を言われ、喉が詰まり信じられない楓は、詳しい事情をボウズ頭に聞き出す。
「実はお笑いプロダクションに入る事が決まっていたここの卒業生が、卒業後、やっぱりプロダクション入りが無しになったみたいで、怒ったその卒業生はプロダクションの社長を殴りに行って、それで社長も怒ったらしく、うちの笑研は当然嫌われて、今後生徒達は笑研からプロデビュー出来なくなったらしい……。それを聞いた部員達は今朝一斉に退部届けを出し、他の部に移動しちまった……。そこにいる二人は今日入ったばかりだから、残ったのは俺だけなんだ……」
ボウズ頭は寂しげな目で、お笑い研究部を襲った急なアクシデントについて語った。
「そっそんな……」

楓はガックリと肩を落とした。
部からのプロデビューが不可能になったからではなく、沢山のお笑い好き達と絡んで、自分のお笑いレベルを確かめられなくなったからだ。
そして中学の時に学校のお笑い大会で爆笑を取った自分のネタが、どれだけ通じるのか、試したかったのだ。
楓はその為に、親の反対を押しきり、辛いアルバイトをして上京資金を貯めて、創仁学園に入ったのに、全ては水の泡になってしまった。
（残ったのはこのボウズの人だけか……この人何だか、さぶそうだしな……お笑いに対しての想いだけは熱そうなんだけど）
目的を失い、すっかり気落ちした楓は、大幅にパワーダウンしたこの部に入部するべきかを改めて検討する事にした。
「そういう事でしたら、とりあえず入部に関してはゆっくり考えます。では失礼しました」
府抜けと化した楓はそのまま部室を出ようと、後ろのドアへゾンビの様なスピードでフラフラと歩き出した。
他の三人は、しばしその姿をポカ～ンと静かに眺めていた。
シーンとした部室に、超スローなゾンビ楓の擦る足音だけが空間を走っている。そして楓がようやくドアノブに手をかけたその時、ボウズ頭が沈黙を破る様に口を開いた。
「ちょっ、ちょっと待って君ー！　なんかもう二度とここに来ない様なオーラを背中から感じるんだけどっ！　ねえっ！？」
酷くショックを受けているせいか、その言葉は残念ながら楓の耳には入らなかった。

雑音を完全にシャットアウトした楓は、ドアノブを回し、ドアをゆっくりと押し開け始めた。

「ハゲ長！　ヤバいッスよ！　このままじゃアイツ帰っちゃうッスよ！」

先程卓球の審判を行っていたロンゲの美男子が、ボウズ頭（ハゲ長）に警告した。

「わぁーってるよ！　おい、オーモリ！　お前の体重で奴を食い止めろ！　なんとしても奴を入部させるんだ！　王子（ロンゲの美男子）は入部用紙持ってこい！　ゆけぃ！」

ハゲ長の指示でオーモリと呼ばれる太った男子は猛スピードで走り出し、頭上高くジャンプして、楓の上方から背中に重くのしかかった。

ズドーン！

「ぐっ！　重……い。何するんだ……どいてくれ……」

オーモリに潰された楓はうつ伏せになり、息苦しそうにうめいた。それを確認したハゲ長が楓に駆け寄る。

「ハゲ長！　指示通り確保したよ」

オーモリは楓の上で右腕のちからコブをモリッと出し、満足気に言った。

「でかしたぞ！　ミッションコンプリーッ！　お主には後でカレー

のタダ券を進呈しようぞ」

オーモリは
「っザス！」
と感謝し立ち上がると、楓から離れた。

すると休憩室にある入部用紙を王子がとってきた。
ハゲ長はその用紙を受けとると、楓に質問し始めた。「さて、手荒なマネして済まなかったね。悪気はあんまりないんだ。許してくれたまえ。それじゃあ先ず君の名前から聞こうと思う。……んん？」
早く名前を吐けと言わんばかりの、理不尽なハゲ長の眼に、楓は迷いながらも、うつ伏せのまま渋々口を開いた。

「か……かえで……中川楓です……」

「あらら～、結構なお名前お持ちじゃないのぉ～。我が笑研にピッタリじゃない。なあ野郎ども！」

「――ッス」
「――っかな」

ハゲ長の言葉に同意する二人。そしてハゲ長は入部用紙の名前の欄に勝手に楓の名前を代筆している。

「――が～わ、か～え～でっと。よし、名前オッケー！　次、住所、携帯番号、動機、教えてっ」

楓は勢いで住所、携帯番号を教えたが、入部の動機に困った。
楓が入りたかったのは以前の部で、今の部には入部動機など全く無

いからだ。
困った楓はしばらく沈黙した。
「も～う長いよ！　動機はいいよっ。おれが適当に書くから――貸して！」

ハゲ長は楓から、なかば強引に用紙を取ると、動機の欄にスラスラと書き込んだ。
最後に楓の人指し指の拇音を取り、見事入部が完了した。

「ようこそ我がお笑い研究部へっ！　さあさあ楓っち、いつまでもそんな所でぐったりしてないで休憩室でゆったり話そうや」

ハゲ長はキラキラとした瞳でそう言うと、楓の腕を掴みズルズルと引きずりながら休憩室へ向かった。
残る二人もその後に続いた。
休憩室に着くと楓もようやく自力で立ち上がり、室内を見渡す。
薄茶色のテーブルと椅子が六つ、テレビ、書類などを保管する棚などがある。

四人が椅子に座るとハゲ長が話始めた。

「えーそれでは皆さん、先ずは楓君に自己紹介をしたいと思います。と言うことで私からいきます。私の名前は石井智広、あだ名はハゲ長です。一応ここの新部長です。はい次ぃ！」続いて椅子から立ち上がったのは黒髪で軽いパーマがかかった、太っている男子――楓とエレベーターに乗り合わせた男子だ。

「ハ～イ、ごきげん如何かな？　僕の名前は細田俊男。ついたあだ名は何故かオーモリさ。入部の動機は、友達にお前はお笑いやるしかねぇって言われたからかな。嗚呼、今日も何処かで恋の予感～、

以上かな」

（ププッ、何だよそれぇっ！　やっぱりこのデブウケるわ！）

続いて先程卓球の審判をしていた、柔らかくシルバーの長髪の美男子。

「どもッス。星崎　誠ッス。あだ名は王子ッス。動機は研究部っていう響きが知的だったからッス。以上ッス」

三人の自己紹介が終わり続いてハゲ長が部の決まりを話始めた。

「既にお気づきかと思うが、この部はあだ名で呼ぶ決まりになっている。そうする事で、より早く親しくなれるからだ。あだ名の決定権は部長である私にある。そこの二人も私が決めたあだ名を大層気に入っている模様。そこで楓君のあだ名も、ずっと考えているんだが、余り特徴が無いため、そのまま楓とする！　なんかあだ名っぽいし」

「そんな適当なっ！　僕にも研究部員らしいあだ名を下さいよ！」

そんな楓の願いも虚しく、楓の呼び名は変わらず楓となり、最後に楓が自己紹介をする事になった。

「あっ、中川楓と言います。あだ名は……楓です。ここに入ったからには必ずこの部を……」

「イチニイサンシゴーロクシチハチクージュー！　イェーイ勝ったー！　ジュースオゴリー！」

「ハゲ長！　今のはズルイよ！　四の所シって言ったじゃないか！　それがなかったらギリギリ指抜けてたのに！」

指相撲に負けたオーモリが必死にハゲ長に抗議している。それを見た楓の顔がはんにゃに変わった。
ゴゴゴーッ……（楓怒りの音）

「貴様らぁぁ、人が自己紹介してる時に指相撲だぁ？　その指一生使えなくしてやらぁー！」

ボキボキッ！

「びえぇー！」

バキバキッ！

「ぐぬぉー！」

悪い子へお仕置き完了！

指に包帯を巻いたハゲ長が部員にこれからの活動を伝える。

「えー無事？　皆の自己紹介が終わった所で、ついに我が笑研の活動を始める！　それじゃあ野郎共ー、ラケットを持って練習場に行くぞ、今度はダブルスだぁ！　着いてこい！」
（えぇっ！？　笑いのネタとか考えるんじゃないの！？）
ハゲ長の勢いにすっかり洗脳され、本来のお笑い活動を忘れた二人は
「ラジャー！」
と、一斉にバカ返事をし、練習場へ向かった。

「ちょ、ちょっとっ、みんなっ、なんで卓球するんですかぁー！？」

楓の正論はバカ三人の心に届くわけもなく、虚しく自分の耳に戻る。

一人休憩室に取り残され、改めてこの部に対して不安がよぎる。
練習場の方から聞こえる三人のアホ声がイラッとさせる。
楓はふと思い出した様に自分の入部用紙に書かれた動機が気になった。
あの時部長は何て書いたのだろう？
そう思い、棚を探ると自分の入部用紙を見つけた。
入部動機の欄に視線を合わせる。

〈入部動機〉
もちろん、世界一カッコイイ部長を尊敬しているからです。てへっ。
部長になら抱かれても……きゃは！　この部に入れて幸せです！

ゴゴゴーッ！（怒音）

「あのハゲェェェー！」

楓はハゲ長へ、死のロックオンをすると、死神の如くハゲ抹殺へ向かったのだった――。

こんな部だが、一応目的の部に入った。
頑張れ楓！
逃げろハゲ長！

序笑（後書き）

【登場人物紹介】

◆石井智広（いしいともひろ）…笑研の新部長。通称ハゲ長。高校二年生。唯一笑研の全盛期を知る男。ボウズ頭。

◆細田和男（ほそだかずお）…高校一年。通称オーモリ。デブでキザな喋り方。

◆星崎　誠（ほしざきまこと）…高校一年。通称王子。シルバーのロンゲでイケメン。ッスが口癖。

◆マスタード君…黄色の細長いぬいぐるみ。マスターの御守り。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5157a/

天笑の跡

2010年11月12日16時35分発行